

梁川をめぐる人人(三)

——「回覧集」を中心に——

前稿に続き、「回覧集」巻六及び終刊巻七の紹介をもって本稿を終えることとするが、なお余白を得れば、全巻を通じての同人の動き、ほか若干の補遺をも付記したいと思う。

さて巻六・宇佐美の巻頭言で先ず眼につくのは、○「古人トナリ玉ヘル同人二瓶金安君ニ就テ生前親交アリシ諸君ヲ初メ他ノ諸君ニ於テモ追懷哀悼ノ意ヲ寄セラレン事ヲ望ム」と、あるほか、○「梁川会例会ニテ如何ノ方法ニテ如何ナル事ヲ為スガヨロシキヤ開会順序トモイフベキモノニ就キ御意見御趣向ヲ擬ラサレン事ヲ望ム」と、大方の意見を問い、さらに○「回送順序ノ氏名ノ下ヘ今回ハ所屬ノ宗派、教会名、寺号、入籍年月等ヲ記入セラレン事ヲ望ム」とあって、これは各自応じているので後にあげるが、他は「綱島先生ニ対する所感、信仰上ノ所感、会合ノ報告、身辺ノ消息」と従前通り。が、「特ニ信仰上ニ限ラズ趣味アル記事、詩歌等ヲ記セラレン事ヲ望ム」と述べているのは編者宇佐美の趣味にもよるが、やはりそこには宗教と文芸を調和の相でとらえた梁川思想の系譜——そのローマン的な思潮が息づいていることを感じさせる。記載は明治四十二年三月十日。

川 合 道 雄

次いで「中桐確太郎君寄贈清国風景写真六枚(同君の説明)」と記され、左一ページに全面二葉ずつで三ページ、右側に中桐の詳細な説明付で、西湖孤山中にある行宮前の門、同じく西湖一島中の湖心亭、西湖十景の一なる双峰插雲の景、保叔塔、雷峰塔、それに杭州城外の日本居留地の風景六枚が貼付されている。ところで、宇佐美が求めた会員各自の宗派・教会名・寺号・入籍年月だが、本号も新願一名、飛入り三名(後述)を加え、常連約四十名が執筆、うち十余名は右への応答がないが、記入者のみ掲げると左の通りである。

(なお一、二判読困難なものは除く。)

(A)所屬ノ宗派・寺号・教会 (B)所屬年月

望月 世教 (A)曹洞宗

中山 三郎 (A)組合教会 (B)三六・五・一〇

一色 義朗 (A)キリスト教組合派・神戸教会 (B)三三・三、第一

日曜

西山いほり (A)同上 (B)明治廿二年七月受洗

魚住 影雄 (A)元基督教会(本郷森川町)、現組合教会(本郷竜岐

坂) (B)三四・六・二、三六・五

宮本 和吉

(A) 禅宗

安倍 能成

(A) 家の宗旨禅

川合 信水

(A) 父ノ家ハ禅宗、母ノ家ハ真宗、余ハ基督教(無所属) (B) 明治二十二年八月メソジスト教会ニテ受洗

斎藤 勇

(A) 日本キリスト教 (B) 三十九年十一月二十三日

石田 馨

(A) 家庭ハ真宗

中村 金蔵

(A) 組合教会 (B) 三十九年十二月十日

山本 泰一

(A) 組合教会

大宮春之助

(A) 家ノ宗旨ハ真言

宿南 昌吉

(A) 家ノ宗旨曹洞宗

西田 永助

(A) 本願寺

今岡信一良

(A) 始メ監督教会、後組合教会 (B) 卅一年、卅四年以後

久代 省三

(A) 家ハ臨濟禅、母ハ浄土宗、弟ハ真言、師ハ真宗、基督教、禅、予ハ久代宗

三浦 修吾

(A) 家ハ真(?)宗、兄弟ハ三人共基督教 (B) 洗礼ハ三十四年十月弥生町桜井牧師ヨリ受ク

魚住 正継

(A) クリスチャン、チャーチ無所属、本郷森川町三

鈴木 礼助

(A) 組合教会 (B) 三五、十二月

金子 卯吉

(A) 始メ美以、後チ組合教会 (B) 二十八年、三十八年

井野 暢光

(A) 天台

八代 義定

(A) 家の宗旨禅宗

佐藤長平治

(A) 曹洞宗

堀米康太郎

(A) 同上

小田島庄太郎

(A) 耶仏天儒(川合注・以下不明) (B) 卅四年カラ教ヲ受ケル

宇佐美英太郎

(A) 基督教・本郷教会 (B) 三十七年六月

斎藤 遊雲

(A) 仏教浄土真宗 (B) 久遠劫ヨリ

続いて前号同様、中桐宛梁川書簡⁽¹⁾一葉が貼付されているが、今回は巻頭を飾る静観画に代り、巧みな毛筆で神戸梁川会の光景を描いた写生⁽²⁾が二ページ——其一が「午後四時、四角生写」とあって二間続きの質素な平屋、障子をあげ上げた椽先きにめいめいの帽子、ステッキ、洋傘の類、芝の伸びた庭前の⁽³⁾に七人が車座になっているが、中には片ひじ突きで寝そべっている八字ひげの洋服紳士もいる。まん中に開かれた書物が二、三冊、急須、湯飲み、菓子袋、ちよつと離れてコンロのヤカンが煙を吹き、裏庭の見通せる室内には、和服の女性がポツネンと控えている。其二は「閉会下山の景、呈多川晚芳兄」「感謝午後十時」とあり、山間を打ちつれて辞去する後姿に主人夫妻がランプを高く掲げて見送っている。

なお、神戸梁川会は金子白夢の転任で第四回が今岡信一良宅、右の図はちよつと趣向を変えた第五回五月八日の光景だが、前回同様今岡が詳細な報告をよせているので巻頭の設問——「梁川会例会ニテ如何



東京梁川会・兼山月送別会（巻六収）

ノ方法ニテ如何ナル事ヲ為スガヨロシキヤ」といったことへの十人十色の応答に代え、その他二、三の例会と併せて簡単に摘記しておこう。場所は平家の古跡「須磨」の谷の某氏別荘⁽²⁾で、「四隣早人家なく唯新緑の色のみ」といった仙境。午後二時頃から庭の芝生で開会、先ず「梁川氏遺著を読むの感」について二、三の新入会員の談、信仰実験談、二声録が話題に上り、「病鶏を痛みて」の一文に「釈然として宗教的疑問を解決した」人の談等等。……日暮れて室内での会食は「万事会員の手料理」故「風流を極」め、食後再び清談。午後十時「会を閉ぢて山を下らんとすれば時鳥一声……浜辺の停車場で汽車を待てば千鳥さへ鳴く也」とその状況を写し、続いて数名の吟詠をも紹介しているが、当日の来会者は十六名、職業別では判事検事五名、教育家四

名、新聞（雑誌）記者二名、会社員一名、僧侶一名、牧師一名、夫人二名となつてゐる。まあ以上の顔ぶれは一応インテリ上層階級と目されようが、他方農夫八代を中心とする盤城梁川会⁽³⁾、吉田東馬が代表する鉾山男⁽⁴⁾の秋田梁川会、西田天香を囲む京都梁川会等等、梁川の人の思想が投げかけたさまざまな波紋を思わせる。また、別に横浜梁川会は四月十一日、綾部郡是製糸に赴任する山月の送別会を兼ねた東京梁川会に合流しているが、当日のメンバーは中村金蔵解説の写真によると、前列左から近角常観、川合山月、西田天香、西山いほり（近角、西山、西山は特別参加、後列左から魚住、前島、安倍、大宮、望月、中山、山本、一色の十二名（綱島静観は令嬢急病で中座）。うち横浜会員は大宮、山本、中村だが、同会員は続く十八日さらに小針金三郎宅で例会、というのも右の三名に加え、新たに小針はか計七名程の増員となつたためで、報告者山本泰一の分析によると、横浜梁川会は敬虔派純理派（啓蒙派）の二派あり、敬虔派はさらに感情派（実行派）二名、理性派（求道派）三名に分かれ、不明一。また「啓蒙派として一名ありしも近頃理性派に移れり」と、独特の観察を付記している。

なお、小針金三郎は本号からの飛入りで基督教徒、梁川とのつながりは活字を通してのものながら「一昨年十月伊勢佐木町石田亭で横浜梁川会組織の話のありました時初めて中村金蔵様及宇佐美様に御目にかゝり……」というのが機縁とあり、同様飛入りでは、「小針兄の紹介で」と横浜梁川会にも加わった二十二歳の小学教員後藤秀男、他は「小田頼造様の紹介にて……中村金蔵様に御目にかゝり」という浜松

の写真家種子謙三、三十四歳。但し、種子は回覧集のみの新加入である。さらに東京梁川会については中山三郎が、「十二月（小山氏宅）、一月（余丁町）、二月（魚住氏宅）、三月（余丁町）」の記事を小山氏、魚住氏、一色氏にお願ひします」と書いているので、一、二かいつまんでおくと、先ず昨年（四十一年）十二月例会についての小山報告——参会者は安倍、宮本、魚住、宇佐美、西山、前島に彼を加えた計七人。「先づ宇佐美兄が信仰を強ふるなどいふのを自然法爾の立場から説かれ」たのに対し、「前島兄が……伝道的精神の止むに止まれぬとの見地より」必ずしも不可とせず、大分議論に時を費したというのだが、さらにその後、西山いほりが「頗る奇抜な問題」——すなわち現今女学生にみられる一傾向（イブセンのノラ式でもなく、かといって昔にない一種いやな傾向）をめぐっての「所謂女子の自覚」「近世の女性問題」に関して小山等の意見を求めたことからひとめ、というか、「生等四人は弊害はあるにせよ兎に角女子の自覚の必要の事を信ずる旨を述べました処、前島兄宇佐美兄の大反対をうけました。前島兄は女子は昔の通り女大学式の方がよしと云はれ、宇佐美兄の意見も自覚などとは以ての外との様な御意見」だったと、当座の模様を書きとめているが、年齢、教養、世代の差異を考慮しても、宇佐美等の意外に保守的な側面にやや驚かされる。

続く一月は飛ばして魚住報告——は「二月十四日、日曜、追分の私の下宿に開き」、参会者は斎藤（勇）、一色、中山、小山、安倍、及び本人、別に安倍の親友で同郷の久保勉も加わって計七人。「斎藤君が

オルソドックスの信仰の切実であることを述べられ故先生も晩年オルソドックスに近（イ）かれたと思ふ」と述べ「安倍君が之に同（エ）じた」こと等等、「信仰問題、安心問題、之に関連した時代思潮」その他、「活気ある話が咲いて稀に充実した」会合で惜しみつつ散会したのは十時半頃と報じているが、魚住は相変らずの健筆で例会報告に先き立つ十二ペーじ余り、孤独な現在の心境（彼はこの一文を伊豆伊東温泉で執筆している）、回覧集読後の所感、梁川会の現状及び将来にわたってびっしり誌面を埋めていて興味深い。が、今は紙幅の都合で割愛のはかなく、終りに一色義朗による三月十四日の例会につき参加者のみ付記しておく、当日（日曜）宇佐美は先約で不参、それに魚住ほか数名もあいにく「学校の試験で忙しく」て不参。但し、「当日は珍らしく高野出山の小田兄を迎へたので会衆は中山、前島、両氏それに主人と私」とにすぎなかったが「出色の好集たるを失はなかつた」と報じている。

さて、各地梁川会の模様は右の一斑にとどめるとして、さきの中山三郎は自文の余白に新聞の切り抜き——「蘇峰先生の愛国説を怪む」と題した戸川秋骨の一文を貼付しているので一節のみ引いておくと、先ず井伊掃部頭が水戸浪士に暗殺された桜田門外の変から説き起こし、これは掃部頭が国権を毀損するような条約を外国と締結したためだそうだが、「此の場合掃部頭が非愛国者であるか、水戸の浪士が愛国者であるか、そんな事を問ふのは馬鹿馬鹿しい事である。」と言い、同様イギリスの南阿戦争の際「チェンバレーン氏の政策に対し、非戦論

を唱へた連中が沢山にあつた。……此の場合非戦論者は非愛国的で、チェンバレーン氏等殊に統一党のみが愛国家であつたらうか。そんなことを問ふのは馬鹿／＼しい事である。然るにそんな問題が真面目に而も事々しく今日識者によつて称へられて居る。」と述べた上、こう論じている。

徳富蘇峰先生は此程の日曜講壇で綱島梁川氏の日記に、それが三十七八年当時の記事であるにも拘はらず、当時の大事件なる日露戦争の事には一言も説き及んで居ないといふ事を指摘し、文士と称するものゝ内には愛国心のないものがある。或はその無いのを誇りとして居るものもあると言つて、それを非難して居られる。思ふに吾れ／＼は戦争に就て常に口を挿んで居なければならぬのであらうか。文人といふものは特にさういふ事を仕なければならぬものであらうか。西洋などでは攻撃してさへ差支へないといふのであれば、黙つて居る位なら日本でも許されさうなものである。それが悪いとは如何いふ理由であらうか。云々。」

中山は右についてなんの注記も付していないが、自己の所感を代弁するものとして掲げたのであらう。

また、本号の新顔では、前号で弟影雄が紹介した兄、魚住正継が謙虚な言葉で入会の喜びを語っているが、彼は、先ず暗黙の中に心情が通い合う兄弟の間柄にふれ、「私は弟影雄を真から知つて居る。弟も私を能く知つて呉れます……兄弟間には隠す事は尠もない。それが如何なる事柄であらうと大小や簡煩を問はないのであります。」と述べ

た上、従つて梁川会への入会希望も口には出さず、出さぬため「益々其の念の嵩まる」のを感じていたが、「意の在る処自ら外へ表れ……弟がよく私の意を汲んで……此回覧集が到着して初めて私の為めに労を取つて呉れ……入会の心を容れられたといふ事実を知つたのでした。諸兄姉に感謝致します」と述べているのが印象深い。で、「私が梁川先生を知る様になりましたのは非常に近い事『病間録』が出た時で弟から一本贈つて呉れたに初りました」というのだが、次いで現在に至る自己の内的推移を語っているので要約すると——祖父は伊藤派即ち古学派の漢学者で大の謹厳家であつたこと、ために自家の宗旨真言宗の寺僧に満足せず、父の代から神道を奉じていたが、父が没する前年（今から十年前）、内村の「東京独立雑誌」によつて深い感銘を受け、右の第一号を弟影雄に贈つたところ、期せずして弟も同誌を求めていたこと、さらに弟から受洗の報を受け、自身も牧師宮崎八百吉から受洗したが、間もなく宮崎牧師との距離を感じ始め、ようやく梁川とのめぐりあひを得たこと等等……弟影雄の心的推移とほとんど軌を一にしている。

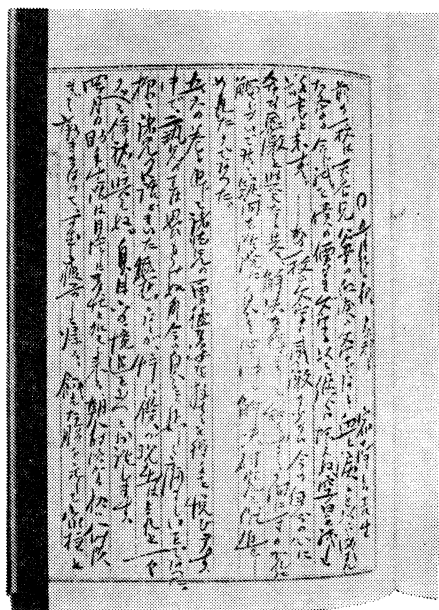
ところで、同人二瓶金安の急逝は、彼が前号で弟の死を悼んだ直後、⁽⁹⁾だけに知友にとつては衝激で、いずれも深い哀悼の意を表しているが、むろん逐一挙げるゆとりはなく、以下、むしろ彼とは没交渉だった安倍能成の感慨のみのぞいておくと——「面識もなく、回覧集の寄書について特に記憶のない人だったと述べつつ、「然るに此程御死去ときいて、前集をあげて見ると、その亡くなられた同君が弟御が亡くなら

れたことを語つて居られる。其の死際の有り難さを語りたいといつて居られる。之を見ては実に黯然としました。……其の死に際を語らんと約束せられた人は、御自身も又其死際の彼方に逝かれて仕舞つた。回覧集は実に痛ましい記念となりました。」と、多感な心情を吐露している。ちなみに、続く文中、安倍はこんなことも書きつけている。

○金子さんの御子供の話が実に面白かつた。「お父さん音が降つてるぜ」にはもうチャームしられて仕舞ひました。何といふかはゆい、直覚的な詩でせう。白い夢を見たといはれた御むすめ子も、何だか天才的で、あどけなくて、非常に心を引かれました。

前号で金子白夢が子供達を話題にしたとき、終日の雨で外出もかなわず読書している彼のそばに、四歳の男児がよつて来て「火鉢の傍に座してジットして雨の降る音を聞いて居りましたが『御父さん音が降つてるぜ』と申しました。」という報告、また自号白夢の由来にふれ、彼の長女が三歳の頃「一週間ばかり夜泣したので老母がお前なぞ泣くのだと尋ねたら白い夢を見た」と云ふので非常に面白い事だ……と思ふて付けたのです」と書いたことへの所感だが、同様、前号に中村金蔵が貼付した綱島令嬢——といっても赤ん坊と西田天香の写真を見て、「綱島小夜子さんの肖像実に可愛い……西田さんも其の無心のけだかさは、小夜子さんに及ばれません」と感激、

○中村さんによつて美しい写真を文集に見られることを感謝します。「中村君は誰人にも親切なり」との川合さんの簡単な御詞は、何やら中村君の御人がらを直指する様に思はれて、なつかしく思はれま



宿南昌吉筆跡（巻六収）

した。

とも書きつけている。

さて、あまり本号に紙数を費すことはできないが、最後に宿南昌吉の近況と、宇佐美の後記を一覧して次号に移りたい。さきの二瓶の死と、それを悼む同人達の追懷は、医学徒宿南にとつても同様「悲しく痛ましい」感慨を呼び起こしたことに変わりはない。だが彼は、今それをしたためる余裕さえない多忙な日常と、なお癒されぬ内的苦悩について、まず記さずにはいられなかったもののようだ。朝八時から夜八時頃まで働かずめの助手生活——午前は外来患者の予診や包帯交換、受持入院患者の手当やその間の雑務、そして午後ほとんど毎日手術

室で刀を執る。彼はその間の緊張と集中こそ「自分には最充実した、気合のこもつた生活の時間である」と述べるのだが、しかも依然として満たされぬ心底の空虚と悲哀をほとんど独白に近い口調でこう書きとめている。――「忙しいから考へる閑がない。……併し、何時となく心の底に、^{わだかま}蟠つて居る問題は自分を不断に悩ましている。……僕の目下の疑惑は自個と現代である。」しかも「その自我が小さくて卑しい。……卑しい小さな自我には現代も同じ調子のもに見える。光輝ある世界ではない混乱悲哀の世界だ。内も外も要するに同じ色合である。自我が解脱さるゝ時に或は現代の解釈さるゝ時であり、信仰も亦□□の境に達する時であらうが、果してそれがいつであらうか。……つくづくと孤独の思ひに淋しさ堪えがたい折ふしが慓くない」。なお続く文末、彼は語調を変えてこんなことも書きそえている。

こんな独語はもう止めましょう。さしあたつての悲しい体験は、將にこの世を辞せんとする患者の枕頭に待するときです。……闐然として無言に頭をたるゝ間の苦痛は何とも云ひ様がありません……。だが、その避けられぬ「死」が、わずか三ヵ月余後、突如としてほかならぬ彼自身の上に襲いかかろうとは……。右については宇佐美が文末、寝耳に水の驚きで、あわただしく報じているので目をそそぐ。宇佐美の記述は、八月十四日から十八、二十、二十一、二十二、二十三日と細分した日付で約十六ページ。本号では珍しく約三分の一を内省的（むしろ自虐的）な自己告白に費しているが今は措き、以下宿南に関する記述のみにとどめるが――二十二日「宿南君の甲斐々々し

く働かるゝを思ふて何となく君の面影を思ひ浮べる。又お出逢ひして見たく思ふ。其何故に然るやハッキリ書けないがたゞお出逢ひしたいのである。」と書いているが、むろん彼の死など想像外のことだったろう。ところが、「越えて二十三日回覧集の冊子を買ひ^{ガッ}旁ら本郷の一色、中山両君に所用あつてお尋ねした処驚くべき一事を伝聞した。」と次のように書きつけている。

宿南昌吉君本月十五日病氣に罹り十七日永眠。ツイ前日同君に就て快き回想をなして居つた僕の驚きは非常であつた。何の病氣で、何処で、どんな模様で死なれたかはまだ丸で分らないが、一見丈夫さうな、呑気さうな、口数のない、ドッシリした同君が昨今に死なうとは鳥渡考ひ得られない事である。……僕等の力落しは非常だ。宿南の死は明治四十二年八月十五日、死因は、^(?)彼が勤務する京大病院で手術した患者の敗血症菌に侵されたものだったが、この時点では計報に接したのみで詳細はまだ不明、病弱とはおよそ無縁にみえた存在だけに、その衝激は一層強かったに違いない。宇佐美によると宿南との会見は二度、一度は「京都西田君の寓所と山科の天花香洞で」、他は卒業後母君と共に上京、梁川会例会席上で逢つた昨年暮のことといい、「二種飄逸な横柄な風格に変わりはないが何となく品が付いて落付きもあつて見違へるやうな紳士になつて居られるのを見て……喜んで居たのである。」と追想しているが、また再会を約しつつ果たせなかつた恨みとともに「同君の温良なる性格が僕のくねり過ぎた性格に反映したものか、何となく感じのいゝ人だと思ふて又の邂逅を期して

居たのであつた。今思ふとドーモ余り感じがよすぎて居る。死ぬ人はあんなものかと昔臭い事も云ひたくなる。実に惜しい、気の毒な……」
 と思ひの限りをぶちまけている。

さて、このへんで本号を切り上げねばと思うが、なお二、三の報知のみ付記しておく、二十二日——「安倍、魚住、宮本、小山の四君は文科大学を卒業」されたこと、「魚住君には是非先生の跡仕末をして貰は」ねばならないが、「魚住君の準備が出来るまでは吾々の器量でドウのコウのといつて手の付けやうがないからソレまでのツナギに」お互い回覧集に精を出して待つてゐる積りだということ、二十三日——「井野暢光、久保田正彝両君天華香洞に入り玉へし由」と報じているが、右を受けた文末、次のように述べている。

尚西田天香君の事業は吾等初め本集の人々も未だ其全豹を窺はざるが故に至る処に種々の疑問あり、これが告白は毎回希望し居る処にして嘗て宿南君にも其記述を依頼したる事ありしが同君今や古人となりて天花香洞は旧に倍するの牽引力を以て著しき現象を挙げつゝあり……西田君并に洞の諸君、告白に吝なる勿れ。

次いで巻七に移るが、巻頭宇佐美の「この冊子に書いて頂きたい事」の要点は——「宿南昌吉君の追悼」「綱島先生の追懐」同じく「綱島先生の信仰并に先生没後の信仰上の感想」「綱島先生没後の事業」等々で他は従来同様、明治四十二年八月二十三日夜とあって、続く回覧順序の氏名欄には約四十余名が記載されているが、寄書の有無、別に無記名の新顔、飛入りもまじつてやはり総数は不確定。末尾に「明

治四十三年五月初旬帰着、同五月十四日回覧未了の魚住正継氏に回五月三十一日帰着」と大書しているので、一巡するのに八ヵ月から九ヵ月を費したことになる。同人の増加は、この種の回覧誌にとって、すでに限界に近づきつつあったといわねばなるまい。このことについては本集後記でも、「回覧集同人は第八集の表丈の人で動かさない積り」と、またも宇佐美が提議しているが、残存しているのは本集（巻七）までで、第八集（巻八）が出たかどうかは不明である。ただ、全巻梁川の霊前に供され、また保管を託された静観（綱島政治）が忠実に右に従ったことは綱島家での整った保存状況からも明らかで。ここで散佚したとは考え難く、あるいは多岐にわたる同人数の自然増（知人達による借覧の増加も含む）、右にともない、旧同人の就職、転勤、移住を加えた遠隔地の拡大等々が相まち、回覧途次に在所不明となつたものか、あるいは何らかの理由で発行自体が立ち消えになつたものか、今のところは確認に至っていない。次いで四月二十四日転居、麻布区新堀町三番地、宇佐美英太郎と、これも誌面一杯に大書している。続いて中桐宛梁川書簡が貼付され、裏面は静観による「甲州河口湖ノ一部写生」——観光名所と化した現代のそれとは別天地ともいうべき幽邃な湖畔の景だが、他に貼付されたものでは安倍能成が自文の前二ページに、「これは今度出版になる我観録中に出るもの」と注記し、梁川筆の我観録第一、雑記（其二）（其三）の題字及び表紙の写真四枚を掲げている。なお、右に続く安倍の寄書は約九ページびつしりで、うち五ページは宿南の死をめぐる報告と感慨で、後注（7）の引

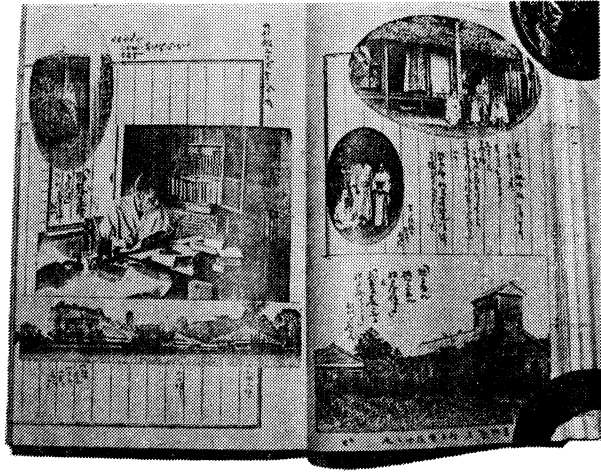
用によられたいが、他はこんど「故先生の御宅の近く（牛込区大久保余丁町一〇六）に転居したこと、私立の中学に出ることになって朝寝坊が早起きになったこと、及び九月十四の三周忌——「先生の霊前で皆無邪気に打興じた」梁川会の模様等等。また別に、二、三の寄書（二瓶、川合、今岡、金子文）への所感も記されているので、一応前二者——故二瓶金安、及び川合山月の二文にふれたもののみ引いておくと、

二瓶兄の新人にのせられた「恩師梁川先生を憶ふ」といふ一編真情の文を読んで更に又黯然としました。片々録中に書いてあつた川合先生の御文章をうれしく思ひました。先生の御文章にはこれまでもいつも敬服して居ました。先生の文章には鏗然たる一種の響がある。と書かれている。ついでながら、本集での山月文中一、二を拾つておくと、先ず

○綱島梁川兄に対しては、其の信仰とか、経験とか、文章とかいふ一部よりも、其全人格の美に感ず。

といい、「兄は今天国にありて常に向上進歩せらるゝこと……問題を此の世の同志に残されしと共に、残したる問題は、自ら天に於て解決されつゝあることを信ず。故に遺著中に於てのみ梁川兄を研究する者は、『何で過ぎたる足跡をのみ探るや』の声をきくことあらん。」と述べている。が、また行を改め、「○中村兄の徳富健次郎君方の写真、新井奥遼師の住処の写真、内村鑑三君の写真、誠に嬉しく一覽したり。」とあるので、以下中村金蔵の寄書を見ておくと、さすがプロの

写真家で見開き四ページにわたり以上の写真がべったり。例によつて細字の注の判読し難いものもあるが一部をつまむと、「徳富先生を訪問したのは八月十四日……丁度二日泊りの返子から帰られた処であつた。サア風呂へ入れと、それは／＼御親切で……写真を撮らせて下さいと願ふ」と、「今日東京歸りに写真やを連れて帰りたいと思ふたが」ついでやめたところとのことで、続く見開き二ページ分、右側中央上段は大きくひげと眼鏡の半身像で、「千蔵村の百姓の友としての徳富先生」と注記、さらに「『神様から常に私共は見られて居る』と先生から教へて載いた」と書きこまれている。下段はやや不鮮明だが畑の蘆花夫妻、「……先生はたうもろこしを折て居る也云々」とあり、背景に浮かぶ屋根の傍に「先生の書斎にて賓客を入る処にて余も一夕茲に夢見た」とあるが、別にどういふものか上段蘆花像の上、半ば欄外にはみ出した形で、書見中の梁川像が小さな楕円形の枠内におさまつていて、その傍にやや大きく「先生は今に本を読んで居られます」と記され、その右手欄外には誌面を横に倒して「先生を送つた、アム雑司ヶ谷のアノ雨の中を……」と、こまごまと書きつけている。左ページ上段は右に無人の蘆花書斎、左が「書斎における先生」とあつて書見中の蘆花、中段は当日庭園での晚餐の景で、チョコンと椅子にかけた小さな女兒（川合注・養女鶴子か）を中心に左が白の筒袖に団扇（うちあ）を手にした横顔の蘆花、右手が夫人、卓上の盆に七、八本のトウモロコシが積まれているが、下段は同様庭園における三人の立像。次ページ上半は屋前での撮影「茅屋ニテ外観誠に粗、室内ハ書斎トナリ食堂トナツテ



中村金蔵撮影の蘆花・奥遼邸・鑑三（巻七収）

にて購ひなされたものなり」と記され、その左手小円内に蘆花夫妻の立姿と、足もとにアグラがきで幼女を膝に本人中村金蔵がおさまっている。ちなみに以上の写真は、「実は八月二十六七日頃、某氏が露国の杜翁に行くから、アノ翁さんに送つてやりたい。丁度よい処で、ナンダカ不思議でならんと申された。杜翁には外に日本のようかんを送ると云ふて居られた。」とのこと、**「私はうれしかった、私の**

居ル」と注されているが、事実現代の蘆花公園に復元

されたそれとは似もつかぬあばら屋で、右から犬とたわまれる蘆花、猫を抱いた夫人、幼女、次に立つ女性

は注記によると「竹崎順子様の孫娘（熊本の学校たりし）で、最後の

折り膝が女中。なお「此家屋は始め小崎弘道様の紹介

写したものが杜翁に見参するとは……」と無邪気に喜び、「先生と枕を並べて」一夜を過ごした翌日、トウモロコシを土産に帰途についたと記している。

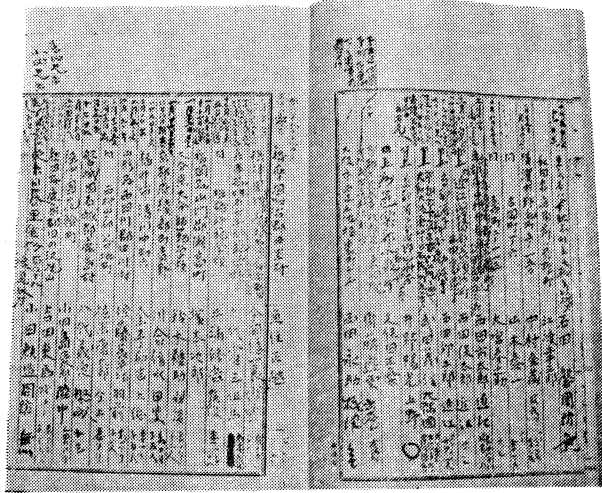
次いで同ページ下段は、「巢鴨聖者 新井奥遼邸の居」と全景があり、「怒る勿れ欲を去れ神に奉仕せよ」右『我等の衷に在る神に就て……』教訓を受けた」と記されているが奥遼の写真はない。次ページ三葉は内村鑑三、左上小さく「今井某の記念館」の立像を貼付、中央大きく「内村鑑三先生書斎の図」は、和服、座卓で熱心に書見中の内村の姿で、『耶穌基督を見よ』先生からの教訓」と書きこまれている。下段は居宅全景を横長に遠望、右からの三棟は順に「外国人住む」「今井館？」「内村師某家、此全景ハ内村師ニ属スルモノ」と注記されている。が、訪問の経路は徳富、内村、新井の順で、後記によると千歳村粕谷を辞し、

○内村先生を帰途訪問した。本間先生の名を以てした。快よく座を与えられた。天然の話を承った。例の写真オ、ソウカ書斎の処をと僅か二時間許りにて巢鴨の○新井奥遼先生を午後三時頃訪問して教を受けた。例の写真……私は写さぬことに極めて居るとの事で……先生が此中に居られること、又私を案内して写させて下さった事、晚餐を……先生の糧を頂いた。……先生の精神も肉と共に私のものとなつた。八時に御別れ申して帰浜しました。

と、走り書きのやや整わぬ文脈ながら記されている。ところで、本号の回覧名簿には氏名下に小欄を区切り、「今度は生

国・妻子の有無」と、編者宇佐美の要望が記されていて、二、三を除くほば全員が答えているので左に掲げると《生国》・《妻子の有無》

網島政治《備中》へアリ、女兒一人《望月世数》《東京》へナシ《一色義朗》《播磨》へ毎度かう云ふ御訊問には閉口く、無有《中山三郎》《石見》へナシ《西山いほり》《備中》へナシ《前島潔》《信州》へナシ



回覧順名簿（巻七収）

小山綱絵《武蔵》へナシ《安倍能成》《伊予》へナシ《魚住影雄》《播磨》へナシ《宮本和吉》《羽前》へナシ《齊藤勇》《岩代》へナシ《渡乙松》《陸中》へナシ《石田馨》《周防》へナシ《江渡幸三郎》（記載なし）中村金蔵《筑前》へアリ、長女九歳、長男三歳《山本一》へアリ、

女子一歳？《大宮春之助》へナシ《西田市太郎》《近江》へ長男十八、次男八《西田保太郎》《近江》へナシ《西田卯三郎》《近江》へアリ、女兒一人《武田義信》《大隅国》へアリ妻子、女信子六ツ、男寂徳三ツ《井野暢光》《上野》《〇》久保田正彝（記載なし）齊藤遊雲《出雲》《有》西田永助《摂津》へ無《魚住正継》《有妻、子ナシ》今岡信一良《出雲》《有妻、子ナシ》久代省三《但馬》《無妻無子》三浦修吾《筑後》《妻一人、子二人》塚本次郎（記載なし）鈴木礼助《羽後》《妻アリ、子二人》川合信水《甲斐》《妻アリ、子五人》金子卯吉《上総》《妻アリ、子五人》佐藤長平治《羽前》《妻アリ、子二人》堀米康太郎《羽前》《妻アリ》八代義定《磐城》へナシ《小田島庄太郎》《陸中》《三男アリ》吉田東馬《陸中》《妻アリ、子三人》小田頼造《周防》へ無《中桐確太郎》《三河、但し三才から岩代》へアリ《宇佐美英太郎》《能登国》へなし

となっている。この中、新顔は前島潔（住所・芝区栄町）、□渡乙松（同・本郷区本町）の二名だが、別に名簿欄には無記名の飛入りで、本号からの福田利祐、六号からの種子謙三、小針金三郎の三名がいる。さて、このへんでひとまず宇佐美の後記に全般の動きを追いつながら、その間の二、三をめぐって多少関連するところを述べておきたい。日付は六月三日、宇佐美英太郎——まず、〇「東京梁川会は昨年十一月より仕組を変へて毎月十四日午後一時より牛込梁川先生旧庵にて開会、当番幹事を定め、幹事開会前初めに回光録を朗読して感話をなし、閉会迄司会の役をなす事に定め実行しています。」とあって、十一月以

降本年五月までの当番名を記した上、来客として「十一月の会は小田さん、逸見さん、二月の会は帰朝中の中桐さん、五月の会は木下尚江さん、逸見さん」などがあつたと報じているが、○次は宿南に続いてまたも訃報——同人武田義信の永眠と、さらに「八代さんのお父さん、斎藤勇さんの舍弟が無くなられた」と相つぐ不幸を伝えている。しかも、このうち武田は本誌上の四十二年十月二十六日付寄書で、宿南の死をめぐる当座の模様を詳細に記しているので、その彼の死が知友に与えた衝激は一層大きかったに違いない。彼は宿南逝去の報に驚きながらも、先ずその老父の身を案じて急ぎ、同家につけ、一人ションボリ留守居の老父から事情を聞くとともに、さらに「病院の様子を伺はんものと」玄関まで老父に送られて歩を運んだとき、「門内にかき入れたは昌吉君を寝せた籠……直ぐに御身内の御一人と共に相胞で室に入れ床に就かしめたのであつた」が、「洋装のキチントした謹嚴の体容は何処にも顯はれた兄の姿は肉色まで生前其儘で、安然熟睡の姿と外見へなかつた」と記し、さらに「今、宿南君母堂の心尽しに、昌吉君の常に用いしひじつきと亀の文鎮トラ余ニ与へて昌吉君のかたみとしてよと遠き但馬から送つていただいた。ひじつきを木魚のうけとして亀と梁川先師の戒めの文ある写真に焼香云々」と書きつけているが、翌四十三年六月三日付宇佐美の報知までわずか七月余の間、彼もまた二瓶や宿南同様、死者を悼む遺文をかたみに死者の籍に帰したのである。

また、弟を亡くした斎藤勇は宿南の死を悼むとともに、「吾レ亦去

月十八日（川合注・四十二年九月記）終ニ弟ヲ失ヒ、痛悼措ク能ハズ、吾レ一個人トシテモ将来ノ計画ヲ根抵ヨリ覆サレタル感ナキヲ得ズ。」と、次のような所懐をしたためている。——『「未ダ生ヲ知ラズ、焉ンゾ死ヲ知ランヤ」等と茶カシ了リタル孔子ハ、日常平凡ノ生活ニ於テコソ……裨益スル所アラムカナレドモ、愛スル者ヲ失ヒテ涙ニカキ暮ルゝ我等ニハ何ノ為ス所ゾヤ。サラバ仏教ハ如何ト言フニ……余リ冷カナルニ過ギタリ……唯、空トカ無一物トカ言フニ至ツテハ冷酷也……。」また断念せよというが、「泣キテ泣キテモ泣キ足ラヌ生死ノ別レニ逢ヘル者ハ、其ノ如クアツサリトアキラメラルゝモノニ非ズ……我等ハ斯カル時寧ロ俱ニ泣イテ泣キ明カス友ヲ悦ブ。悟リタルゲノ顔シテ、冷カナル理屈ヲ説ク者ヨリモ、ラザロノ死ヲ聞キテ痛ク悲ミ走リテ其ノ屍ノモトニ至リ「涕ヲ流シ給ヘル」イエスハ更ニ尊ク在スニアラズヤ（ヨハネ伝十一章）。」

さらに続けて言う。

然レドモ只々嘆泣ヲ事トスルハ非ナリ、我等モシ人ハ地上幾年ノ生活ノミヲ以テ終ルニ非ズシテ、死ノ関門ヲ過ルヤ天上光榮無限ノ生命ニ入ルナリト思ハバ、我等ノ心果シテ如何。復活ノ信ハ今更ノ如ク思ハル。コムニ逝ケル者モ残レル者ニモ、言ヒ知ラヌ慰メコソアルナレ。

”……tho’ from out our bourne of Time & Place

The flood may bear me far,

I hope to see my Pilot face to face

When I have crost the bar.” —Tennyson

別に文末、筆を転じて「魚住、安部、宮本、小山ノ四兄がメデタク大学ヲ卒業セラレ」たことを「深く祝シ且ッ感謝ス」と、先輩達の前途をも祝福している。

続いて宇佐美は、○「本集は一字を忽にせず熟覧……執筆諸君の心易く懷抱を傾け給へし事を御礼申します」と述べるとともに、「回覧集は天下の公物であります。一刻者の小生如きに御介意なく虚心担懷衷心を披瀝し給はん事を望む」とも付記、彼自身もまた虚心卒直に自己の心境、所懷を披瀝しているのだが、ここでは、さしあたり故師にふれた一節のみ引いておくと——○「信仰上の態度を猥りに積極的だとか消極的だとかいふのは漠として居る。世間的に見て積極的と見ゆる事が存外無意義であつたり消極的と見ゆる事が却つて大積極であつたりする事がある。……僅かな外部に顯はれた云為をのみ積極的といふ事は面白くない。ソウいふ筆法で行くと井上哲次郎さんが綱島さんを評して何等社会的事業をなして居ないと云つたのを承認しなければなるまい。(中略)世間的にいふと出世間的にいふとでは自ら意味が違ふと思ふのである。不立文字が消極で、大挙伝道が積極的などは頗る浅薄に失すると思ふ。」○「纏まる事、徹底する事が最もいゝのである云々。」と記している。

次いで同人間の消息に及び、○「一色さんも随分弱つてお出でであつたが此頃は元氣に見へる。三浦さんも御機嫌恭賀々々」と述べた上、○「江渡さんが国へ歸られる。西山さんが横浜へ赴任される。井野さ

んが国へ歸られる(御不快の由御用心なさい)。鈴木さんが仙台に赴任される(官報で承知)……」とそれぞれの動きを伝えているが、さらに○これまでの集を印刷して頒布したくも思ふが」いかげなものかという再度の提案、○「巻の停滯は不得止事情」とはいえ、なるべく避ける方途を講じられたいというこれは毎度の依頼で、別にここでは、「前集の死刑囚の墓の写真がない。見当つたなら、なるべく元の通りにして置きたい」とあって、つまりは貼付の写真が紛失したものだと思われるが、前集に見あたらずぬのでどういふものかはわからない。なお、○「第八集は……今岡さんの御提議の古先生記念碑の事に付御意見を認めて載きたい。」と書いているので一応右——本集、四十二年十一月二十八日付今岡信一良の寄書を繰ると、彼は十数日間、岡山地方の伝道旅行に出かけ(川合注・彼は「此間回覧集を留守宅に永々と留めて置きまして申訳ありませぬ」と詫びている)、「梁川先生出生の地(川合注・岡山県上房郡有漢村)を訪ひ、色々の感想に打たれました」と、その見聞を書きとめていて当時の有漢の状況が彷彿する上、建碑の案もこの間に生まれたと述べているので、先ず右の報告から見ておきたい。

有漢の彼は早速「梁川先生に漢文を教へた脇田氏(9)にもあひ、梁川先生の学ばれし小学校(今は神崎といふ医師の家也)(10)」にも行つて見ました。……幼年の頃に其樹下にて遊ばれしといふ幾年も経たらんと覺しき松の木も見て来ました。梁川といふ雅号の出所たる(?)高梁川の清き流れも見ました。貼付した絵はがきの眺めは梁川先生出生の地より四五里も下流の方にあるのです。」と、文末右の絵葉書も貼付、ま

んべんなく歩を運んだ様うかがえるが、さらに続けて、「梁川先生生誕の地と其旧屋は今の村役場になつて居るのです。右の古松樹は役場の裏門の入口にあるのです。役場の村長代理の人に聞くと右裏門の方が遠からず本門になるだらうといふ事です。さうすれば右松樹は有漢村役場本門入口に位する様になる。」といい、そこで「此松樹の下に此役場の庭に故網島先生の記念碑様な者を天下の同志者よりして建設しては如何。小生はしきりに此事を實行したく思うて帰つて来たのです云々。」と述べ、この案は「現に村長代理神崎助役」も「至極賛成」で、記念碑によつて地方の後進子弟を励ますほか、梁川遺跡巡礼者が受ける感激も少なからぬはず……。「建てる」とすれば如何なる方法によりて如何なる記念碑を建つ可きかといふが如く、具体的意見をも承り度い者です。」と記しているが、このことは、実地に生地を訪ねた今岡ならではの心をとらえた痛切な願いであつたらう。彼は右の自文上欄にも、「梁川先生記念碑を其出生の地に建設するの議¹²」と、重ねて同人一同に訴えている。ただ、彼の提議がどんな反響を呼んだかは、予定の第八集が幻の巻とあつて知るすべもないが、梁川の生家及び誕生記念碑については、有漢の郷土史家（同文化財保護委員）葛野定一氏の「梁川と有漢町」（虫明弘・行安茂編『綱島梁川の生涯と思想』昭和五六・四、早稲田大学出版部収）に、

綱島梁川顕彰会建之と書いてある。……誕生地は現在町役場の一部に變つてゐるが、昔は有漢川の清流に沿うた二階建の堂々たる邸宅で、旧道は有漢川にそつて高梁方面に通じていた。という記述があり、同じく氏の著『郷土に生きている綱島梁川』（昭和五二・九）では、「この家には塀がめぐらされ、塀越しに大きな松の木が突き出して生えていた。」と記されている。筆者もかつて有漢に遊び（昭和四十八年秋）、この碑を訪ねて感慨を新たにしたが、右に記された松の巨木はすでになく、建碑の日付をたどると昭和三十二年八月吉辰と刻まれていて、今岡の提議からはほぼ半世紀を経ている。だが、彼の夢は地下の水脈のように生き続けた末、ついに実現されたわけである。……ちなみに、右を含め、有漢における梁川遺跡については言及すべきものが少くないが、今は別稿に委ねたく、詳細は前掲葛野氏の著、及び同じく右にふれた拙稿を参照いただければと思う。

なお、宇佐美は次集への要望として、○「それから皆さんの内に顔を知らぬ人も数ありますから、筆頭に御自分の写真の台紙を剥がして顔の処丈でも貼るといふ事を課題の一つにしました。其代り今度は生国だの妻子だの歳だのといふ間は控へましたから写真の方は洩れなく御実行を希望します。一枚よりなくて惜しい方は貼つたアトで御申越により御返ししてもよろしい事にしませう。」と書いてゐるが、なるほど一案というか、これなら戸籍調べに類することより親しみが持てようし、また、かつて三浦修吾が、魚住の写真と記憶の彼との違いに戸惑つたような事態も避けられるに違いない。既述のように、三浦は

梁川墓前での魚住の写真（巻三）に、本郷森川町教会での旧知を発見し（巻四）、一時は「魚住君、やつぱりさうでしたね」と語りかけながら（巻五）、しかしどうにも写真の記名と思い出の人が一致しない（巻六）。で、ついには、

中村さんの最新の写真によると私の魚住君だと思っていた人はちがつた。私は前島とある一番左の人を魚住君かと思っていました。森川町の教会であつていた人は此人によく似た人で、この写真にある魚住君はついぞ見た事のない御顔、之は人違いをしましたよ。

といながら、

でも何だかこの一番左の人が魚住君ではないかと思はれてならぬ。

（巻六）

と書きつけているのだが、「中村さんの最新の写真」とは四十二年四月十一日、山月の送別を兼ねた東京梁川会での撮影（巻六）で、この記名で魚住、前島を書き違えたのがもと。宇佐美は早速訂正の上、右三浦文の上欄に「一番左が御注文通り魚住君、其右が前島君、其右が安倍君（書入ノ誤ナリ）宇佐美」と書き込んだので、ともあれこの一件は落着した。続いて——というより最後に、宇佐美はこんなふう

に書きつけてこの巻を閉じている。

○頭がイラ／＼して気分悪けれども、今後一週間程は本業に携はる外なき故、急いで認め纏めて綱島さんへ発送す、諒恕を乞ふ。（六月六日）。

さて、以上で雑駁ながら「回覧集」全七巻にわたる叙述を終りたい。

なお述べるべき多くを逸した憾みはあるが、すでに余白もなく、それらはいずれ後日の補遺にゆだねたいと思う。ただ、この間における同人の住所移動はかなりあり、また、第二集以降の参加者については住所表記も省略したので、右をも含め、凡そを揭示しておくとの通りである。先ず「其一」の同人から（最初の住所は第一稿に掲げたので、ここでは省略）——

○小田頼造「其三」（京都府山科村勸修寺天華香洞）「巻五」（紀伊国高野山高室院内）「巻六」（東京市下谷区初音町三一二三、大野清三郎方）「巻七」（東京日暮里金杉一五九、逸見氏方）○一色義朗「其三」（東京市牛込区原町三二五八、桜館）「巻四」（神戸市奥平野番外五五一一）「巻五」（東京市本郷区丸山福山町一二、塩野方）「巻七」（本郷区千駄木町二七、小林方）○塚本次郎「巻四」（福岡県山門郡瀬高町）○中桐確太郎「巻四」（清国浙江省杭州、金浙師範学堂内）○山本泰一「其二」（横浜市吉岡町一一六）○二瓶金安「巻五」（静岡県沼津町仲町、菊地方）○金子卯吉「巻四」（神戸市奥平野一五五一一三九）「巻五」（福井市老松上町六八）「巻六」（福井市清川中町六）○西山いほり「巻四」（東京市本郷千駄木町五〇、荒川内）○堀米康太郎「巻五」（山形県西村山郡谷地町）○斎藤勇「巻五」（東京市本郷区台町三〇、帝国大学学生基督教青年会館内）○西田市太郎「其三」（京都府山科村勸修寺天華香洞）「巻四」（京都市木屋町三条上ル西村家方）「巻五」（秋田県鹿角郡花輪町、中島藤右衛門方）「巻六」（勸修寺村）「巻七」（花輪町、小田島庄太郎方）

○宇佐美英太郎「巻四」(東京市向島須崎町一三四)「巻五」(本所横綱町一一二三)○斎藤遊雲「巻五」(京都下京区魚棚通間三町東入、松本方)「巻六」(下京区中浅敷屋町、東洞院西二条)「巻七」(下京区仏具屋花屋町下ル、田室方)。続いて「其二」からの参加者は——○井野暢光「其二」(前橋市紅雲分村、龍海院)「巻四」(上州駒形町)「巻七」(山科村勧修寺)○中山三郎「其三」(東京市牛込区柳町三三、相沢方)(抹消)(京橋区南小田原町三一九)「巻六」(牛込区原町三一、永代方)「巻七」(本郷区丸山福山町一二、塩野方)○大宮春之助「其三」(横浜市不老町二一四七)「巻五」(横浜市寿町二一一三)○三浦修吾「其二」(肥前大村)「其三」(筑後国浮羽郡千歳村)「巻五」(播州印南郡福泊、福円寺(冬籠中)「巻六」(兵庫県姫路師範学校)○川合信水「其二」(前橋市岩神村、誠心社)「其三」(東京府北豊島高田村雑司ヶ谷三三一)「巻五」(東京市小石川区小日向台町一五八)「巻六」(高田村雑司ヶ谷四四〇、誠心社)「巻七」(京都府綾部町青野)○武田義信「其二」(秋田県鹿角郡花輪町)「巻四」(京都市新櫓本町、奥田方)「巻五」(京都府山科村勧修寺村)「巻七」(京都市下京区右衛門通り大和路東四丁目石槇町五二)○小田島庄太郎「其二」(秋田県花輪町)「巻四」(京都市新櫓本町、奥田春方)「巻五」(陸中国花輪町)。「其三」からの○望月世教が(東京市京橋区富久町一〇四)。「巻四」からは○魚住彰雄(東京市本郷区駒込追分町、興成館)○今岡信一良「巻四」(兵庫永沢町二、兵庫教会)「巻六」(摂津国須磨村)○安倍能成「巻

五」(麴町区平河町四一六、岩井方)「巻七」(牛込区大久保余丁町一〇六)○宮本和吉「巻五」(本郷区台町一九、三洲館)○小山柄絵「巻五」(本郷区真砂町三二、小山スイ方)。「巻五」からは○久代省三(兵庫県明石女子師範学校)○江渡幸三郎(東京府下田端一〇〇、光明院内)「巻七」(秋田県鹿角郡花輪町)○石田馨(東京市下谷谷中天王寺町一五、信濃屋)「巻七」(本郷千駄木町五七、柳原政雄方)○西田永助(大阪市西区土佐堀裏町一三)○久保田正彝(仙台市東二番町二五、石川方)「巻七」(上州邑楽郡小泉町)。「巻六」で魚住正繼(播磨国加古郡母里村)、「巻七」の○前島潔が(東京市芝区柴町八、岩井方)。なお○西田卯三郎、○同保太郎は「其三」が共に(天華香洞)、「巻四」はいずれも記名なく、「巻五・六」は共に(山科勧修寺村)、「巻七」でも卯三郎は同様だが、保太郎は(近江国坂田郡長浜片町、西田寅造方)となっている。

一九八六・九・二五

注

(1) 明治四十年三月二十二日 中桐氏宛と下段に横書、葉書文面は達者な筆で七行、

尽十方無碍光如来 とはありがたき貴き言葉にも候かな口に称へ候てだに何となく光明海中に摂取さるゝ思ひいたし候也 一兩日中に御目にかゝる機会を得たく奉待候也勿々(『書蘭集』下巻取)

(2) 今岡はインフルエンザの予後須磨に転養したが、全快後もこの地に居住することに決めた旨を斎藤遊雲あて誌上で答え、「山陽線須磨駅を下

りて五分間にして拙宅に達します。住所を詳しく申せば摂津国武庫郡須磨村の内西須磨村字新田二二六ノ三」「夏休みには御待ち申します」と記しているが、そんな関係から「須磨一の谷の某氏別荘」が会場に選ばれたものか。

(3) 磐城の八代義定は、巻六の寄書（明治四十二年七月一九日受）で左のように報じている。

当梁川会は昨冬中二瓶金安君の追吊会を催しました。伊太利震災者の追吊を兼ねて。また去る七日には当梁川会創立二週年ニマウシ記念大会を開きました。

(4) 年譜によると（明治四十二年 42歳）

加藤直士の紹介で郡是製糸株式会社より招かれ、押川方義等と相談の上、四月赴任。教育部創設。（筆者編「川合信水略年譜」『押川方義・川合信水両先生往復書簡集』収）

とあり、また『郡是製糸株式会社六十年史』には左の記述がある。

創立者波多野は「事業は人なり」「人を愛するは人を教ふるより大なるはなし」との信念のもとに、早く創業直後から工場内で工女コウメの教育を実施……明治四十二年（一九〇九）四月には、従業員も八百名を超えたので、会社の教育組織の完備を必要とし、東京にてキリスト教の伝道に従事していた川合信水師を招き……教育部を新設したのである。社長波多野は率先川合師の教育を受けて修養これ努めた。他の役員幹部も漸次これに倣ひ、会社を挙げて教育第一主義の実を示した。「表から見れば工場・裏から見れば学校」とは、当時会社の実情を端的に表現した世評であった。

なお、この間の経緯については、大塚栄三著『郡是の川合信水先生』（昭和六・一二・一五 岩波書店）に詳しい。

(5) 魚住によるこの報告は、オルソドックスの信仰云々をめぐって斎藤発言への今岡信一良の批判（巻六）、右に対する斎藤勇の所懐表明（巻七）となったが、安倍能成も巻七誌上、自己の真意について左のように述べている。

故先生の信仰がオーソドックスに近いといった意味は、信仰が進むに従い、形が単純明晰になって、而かも内容が深遠になる。オーソドックスの信仰の至純なるものはこんなものではないかと希望しての話であつたと記憶します。

また、今岡の見解はこの場の発言につき、「今少し詳しく斎藤法兄なり其他諸法兄の御意見を承りたい」と断った上、

私はドウしても今日の所謂オーソドックスの信仰にあきたらぬ者であります。さればといつて無暗に自由だの進歩だのを標榜して徒らに解剖と批評とに耽りて肝心のライフ迄も殺して仕舞ふが如きは甚だ取りませぬ。故先生の如きは此両極端を超越して然も最もよく両者を総合調和した者であらうと思ふ。故に先生は一面非常にオルソドックスではあるが、一面又非常にヘテロドックスであらうと思ふ、両方あると思ふ。

と述べ、「先生が今日も生きて居らるれば先生は未だ／＼進境を開かれた事と思ふ……。」つまり先生に於てもまだ研究の足りなかつた面、御考への熟さなかつた面もあつたらうし、徹頭徹尾御説に盲従する必要はないわけだから、「先生晩年の信仰及び思想は梁川会の同人に於て之を継承し批評し研究し且つ完成して第二第三の梁川を生むべきである。之が故先生に対する忠義といふ者であらう。」と結語している。右に対して斎藤は、先ず先輩への礼をとり、「今岡兄……兄が帝大在学中ハ我が青年会館ニ在ラレテ、何クレトナク御尽シノ事共、カネテヨリ承リ居リ

……而シテ今、オルソドクシーニ就テ高教ヲ恭ウシタルコト、深く感謝ス。」と述べた上、但し席上での語が多少誤解された感があるが、自分はある時オルソドックスという語を例えばギリシャ教を唱えるとか、新教中でもルーテル説やカルヴィン説を唱えるとかいう意味で言ったのではなく、安倍兄が弁ぜられたように「唯ソノ思想が健全ニシテ充実アリ、而シテ敬虔ナルモノヲ意味シタル也。」といい、

小子ノ如キ信薄ク学浅キ者モ今日世上ニ見ル如キ自由派ヤ又ハ在来ノ信条ニツキ多少ノ疑問ナキニ非ズ、基督教も今後大ニ其ノ説明ヲ変ジ行クコトアラムモ、其ノ間真ニ主基督ノ教ヲ奉ズル者ハ、複雑極マル思想ヲ単純ナルモノニ綜合シ……其ノ信仰ハ自ラニシテ天地ノ大法ニ適ヒ、コチタキ論争ヲ超越シテ純一無雜ナル正信ヲ抱キ、基督ヲ以テ教主トシ自ラ其ノ僕タル心ニテ、断エズ進ミ行ク処ノ信者ヲ、仮リニ「オルソドックス」ノ人ト名ケタリシ也。故ニ今日世人が一般ニ言フ意味トハ異レリ云々。

と弁じている。なお、梁川晩年の思想信仰に及んでは、「今思へば、先生の信仰学識等ヲ未ダ仰ギ知ル能ハザル小子輩が、濫リニ揣摩憶測ヲ逞ウシテ、兎角ノ妄言ヲ吐キタリシコト、無礼高慢ノ極ミナリキ。」と反省しつつも、

然レドモ亦以テ為ラク、先生ハ進ミテ息マザル士ナリシコト、病間録ト回光録トヲ比較シテモ容易ニ知ルヲ得ベシ。而シテ回光録トソノ後著作トヲ較ブレバ、ソコニ亦一段ノ進歩造詣アリ。……後來ノ信仰ハ非常ニ深く高キモノトナラレシニ相違アルマジ云々。

と記している。ともあれ以上でオルソドクシー論議は結着、今岡は巻七誌上、「斎藤勇兄の御意見よく／＼分りました。同感の至りで御座います。」と書きつけている。

(6) 巻六の寄書には左のように記されている。十一月十日 沼津ニテ 二瓶金安

今年の夏は出来事が多かったから回覧集が来たら大に書く積りで居た。処が此五六日風にやられて寝込んだので今回は出来ない。只其中の最大の事を申すと、外国語学校に居た弟が肋膜炎で当地に転地し、遂に当地の病院で去る七月二十五日死んだ事である。彼れは未だ何宗をも信ずるといふには到らぬ自力漢でありながら、其死際の有難さといふものは実に深い。この次に精しく語りたいとおもふ。

(7) 宿南の死——その臨終の模様については安倍能成が「八月二十七日東上の途東京都により宿南君の同郷の親友河本君から……何くれときました。」(巻七)と次のように報じている。

十一日かに不快、腰が痛まれた相です。十二日に病院へ行つて見てもらい、十三日入院、十四日に中西医学博士より危篤、今日中が受合はれぬと診断せられ、それから注射によって命を止めた位だ相です。十四日夜十時帰郷中の母君来られ、翌朝午前一時父上来られ、午前八時遂に亡くなられました。妹八重子君は終始傍で看護せられました。病氣は敗血症とか、原因は十日とかに患者に手術を加へられたが、その時菌がはいったのによるのであらうとのことです。四十度以上の熱と非常の冷とが更る／＼来て、其の苦みは傍で見るに堪へなかつた相です。それでも気分は終始たしかで、臨終の二時間前に髯を剃つてくれといつて、そらされた相です。それから自分で生き帰つてはたまらぬといつて居られたといふことです。これは医者のことであるから、非常な熱にかゝつた病氣の後には、よし直つても痴呆になつたりすることを知つて居たからであらうとのことです。……母君が強い望みに臨終の前に撮つた写真を見ました。妹君の手にさゝえられて頭をも

たげて居る昌吉君の顔は白くすぎ通った様で、遠い世に魂をはせて居る様に思ひなされました。

安倍は右に先立つ八月一日松山へ帰省の途次、京都に立ちよって宿南を訪ねるべく約しながら都合で果たさなかつた。そして遂に永別——今更ながら、「宿南君が……安倍君が来ないか来ないかといつて居たときいてたまらなく感じました。」と及ばぬ後悔を噛みしめているが、もはや京都へ来ても彼の姿はない。それに付けても「昨年の十月小山の内で一所に酒を飲んで、快よく酔い、謡をやるやら唱歌をやる。仕舞いに宿南君が有明節を歌い出して魚住が泣き出したりしたことが思い出される。」と在りし日の姿をなつかしく想起するが淋しさは去らない。「河本君が酒を出したので」少しはまぎれようかと「いけもせず甘くもない酒を少しのんだ」ところひどく苦しみ、十二時過ぎまで胃液を吐き額に油汗を滲ます苦痛を初めてなめ、「或は死ぬのではないか知らんといふ気がチョッ／＼とする。そして宿南君がすぐ目の前に来た様な気が頻りにした。」とも書きつけている。

なお、宿南は近く細君をもらう予定で、京都の宿南の友人から東京の宿南の親友あてにそのことを報じたが、その葉書が着いた夜、追っかけて宿南死去の電報が届いたため、その友は宿南が自殺したと思ったそうで、「死ぬるならトルストイズムに心酔して居た時分に死なしたかった。今死なすとは実に痛ましい」と言っていたと伝えるとともに、「近頃は同君の懷疑、不安、動揺、混乱の時代であつたらうと思います。殊に昨年以來の同君の人知れぬ苦衷を幾分か知っている私には、同君の死は実に何ともいへず痛ましい。」と述べているが、続いて、

○同君を記念する為め、同君の遺書を書架にして宿南文庫とし、肖像額面を加えて京都大学へ寄付し、又同君の文集を知人に分つ計画が友

(8)

人間にあります。無論確定すれば諸君の御賛同を願うかも知れませぬ。と付記している。ちなみに魚住は——「二年前同君を故先生に紹介^{おたづね}同道したことを思い浮かべて……夢のやうに感じ」るといい、「宿南君の思想も晩年はよほど動揺していました様子……トルストイズムに対する疑問が起りて最後は其解決の日の遠きを嘆じてゐました様です。」(巻七)と書いています。また、西田市太郎(天香)は、宿南の追悼会の模様を左のように伝えている。

十月三日に洛東南禅寺で管長河野窮海師によりて営まれた。参拝者百余名……盛儀を極めたが、荒木学長諸博士等を始めとして学友諸君等の追悼の切なさによりてもさすが故人が皆の人に愛され重んぜられたかが分る。あゝおいしいことをした。(同前)

明治三十九年二月二十二日 中桐氏宛(葉書)

主観的にいえば宗教の極致は法悦の充実にあるべく哉神とか道とか自然とかいふ客観的対象の詮義は第二段の事と思はれ候法悦は世の常の快樂と倫を異にすそは寂靜にあらざ大活動を含めりそは実に自己完成の極にして又已むに已まれぬ旺盛なる利他兼済の衝動を含み居候やう存ぜられ候御高見如何

この頃ヤコービの信仰哲学の思想を読みたるに其の見神観の小生のと符を合する如きに驚き申候一言に掩へば知らるゝ神は神にあらず神は意識を以て直接に直覚すべきものを自己の個人格を通して直ちに感得することを外にして見神の法あらずといふに有之候此頃にて又一度御来訪あれかし口にも筆にも叫ばぬことは屢々相見て相感応する外は無之候

奥様はじめ皆様によりしく朝河君に一昨日会ひ候(『書簡集』下巻収)

(9) 脇田氏については、葛野定一著『郷土に生きている綱島梁川』（昭和五二・九・一〇）に、

梁川が六才で知新校に入学し、明治十九年高等知新校を卒業する迄に、最も感化を受けた恩師は、中村長遷と脇田厚の二人であろう。……中村、脇田の両先生は終始知新校の教師として、教授に当られ、公的にも、私的にも梁川は随分と影響感化を受けたことが明らかであり、後年大成の基礎が此頃より芽ばえていたのである。（中略）梁川が勉学時代特に影響を与えた恩師脇田厚とは、永く交際を続け、東京遊学時にも度々文通して居り、脇田厚に送った封書も十一通に及んでいる云々。

とあり、また虫明弘・行安茂編『綱島梁川の生涯と思想』（昭和五六・四・二〇 早稲田大学出版部）にも、

梁川が幼少郷土の知新校で教えをうけたのは、中村長遷・脇田厚らであった。この人々の感化は大きく、梁川は上京してからもこの両氏とは交際を続け、帰郷の時訪問もし、後に中村に梁川文集を贈り、脇田の子息の遊学の世話などしたことが日記に見えている云々。（蛭田 禎男）

と記されている。

(10) 梁川が学んだ小学校——知新校（有漢尋常高等小学校、現有漢西小学校）の歴史については前掲葛野氏の著にくわしいが、右に「明治十年神崎秀甫の上宅を校舎に充つ」とあり、秀甫については、

神崎秀甫氏は……有漢町で開業した唯一人の医師で……学識人格的にも尊敬され……信用組合（有漢農業協同組合）初代組合長として……又明治三十年代には有漢村名誉助役として村政にもつくされ……大正十二年八月十日、六十七才で没した。……明治十年頃……有漢市

場で医師として開業したのは二十才の若きであった。

と記されているが、同じく蛭田氏は前掲の書中、秀甫について、
梁川より一七歳年長、社会的地位も安定していた。早くからキリスト教に入信し……梁川が入信したものこの人の影響と支援が強かったと思われる。

と述べられている。なお、神崎秀甫の生い立ち、梁川（綱島家）のかわり等については、拙稿「綱島梁川の周辺——その生地及び家系をめぐって——」（『国文学研究』第五十六集、昭和五〇・六、早稲田大学国文学会）にやや詳細に述べたので前著とあわせて参照されたいが、以下同文中、御遺族の状況（昭和四十八年秋から翌年頃）にふれた部分のみ引いておこう。

御遺族として、有漢には次男勤氏が八十一歳の御高齢ながら医院を開業されており、また、都下三鷹市には三男三益氏が在住され、現在武蔵野赤十字病院院長兼日本病院協会長として活躍されている。

(11) 文末一ページ分下半に、「備中高梁川落合橋 其一」の絵葉書を貼付、上半部分に、「此処は神戸梁川会の写真をはりますからあけておいて下さい。魚住様か三浦様かの手にある間に送りますからよろしく願います。」と記入されている。

(12) 拙稿「綱島梁川の周辺——その生地及び家系をめぐって——」（『国文学研究』第五十六集、昭和五〇・六、早稲田大学国文学会）。なお右の記述中、梁川生家の番地について、「役場の裏手（市場、新屋二、一六一番の第一地）」と記したのは、葛野定一氏編『有漢郷土史』（昭和四四・七）に「有漢村市場新屋に生る」とあり、また同氏著『郷土に生きている綱島梁川』（昭和五二・九）では、よりくわしく「梁川の生れた家は、有漢町大字有漢二千百六十一番の第一」とあるのによったものだ

が、その後葛野氏はさらに調査の結果右の誤りを『綱島梁川の生涯と思想』（昭和五六・四）収録文で「元は新井屋といい（旧一五一番邸二二三番地）」と訂正、その一本を御寄贈くださった上、左の御教示を得た。梁川の生地は現有漢町役場の一部となっている二、一三三番地で、昔は一五一番邸。二、一六一の一は移転後の溝の上の番地です。氏の不撓の御努力に脱帽すると共に、あらためて筆者の誤記をも訂正したい。

（13）拙稿「梁川をめぐる人人（二）」（『国士館大学文学部人文学会紀要』第十八号、昭和六一・一）を参照されたい。

（本学教授・国文学）